

「選ばれる在外教育施設」を目指して —ニュージャージー日本人学校の取り組み—

前ニュージャージー日本人学校 教諭

北海道札幌市立伏見小学校 教諭 佐久間 みのり

キーワード 在外教育施設、教育課程、英語教育、UDL、広報

赴任校の概要（2024年8月21日現在）

学校名・日本語：ニュージャージー日本人学校

学校名・現地表記：The New Jersey Japanese School

URL：<https://newjerseyjapaneseschool.org/>

1 はじめに

2021年4月から3年間勤務したニュージャージー日本人学校（以下、本校）は、アメリカ東部のニュージャージー州オークランド市にあり、初等部1年生から中等部9年生（中学校3年生）までが在籍している。私の在職時は最多人数の学年で15名、最少人数の学年は1名、ほとんどの学年で児童生徒数が一桁という小規模校であった。

日本での高校進学との関係で、比較的安定して入学生や編入生の見込める中等部に対し、初等部は私立の日系競合校や現地の公立校の存在があり、児童数確保に苦勞してきた。小規模校のメリットを教育活動に生かしつつも、児童生徒数を増やしたいという願いの下、「選ばれる在外教育施設」を目指して行った取り組みについて紹介したい。

2 英語教育の面からのアプローチ

(1) 課題の分析

本校以外の学校を選択した子どもたちや保護者のニーズを考えたとき、「せっかくアメリカに住んでいるのだから英語を身に付けたい（させたい）」という思いは容易に想像できる。本校でも学習指導要領に則った初等部での外国語（5・6年生）・外国語活動（3・4年生）、中等部での外国語の学習に加え、独自カリキュラムとして、初等部1・2年生での外国語活動や全学年での第二言語としての英語（米人講師によるEnglish as a Second Language：以下、ESL）学習を行い、ニーズに応えるべく手立てをとってきているが、児童生徒数の増加にはなかなか結び付かない現実があった。本校の取り組みを外部にアピールすること、そして何よりも児童生徒が「自分の英語力が高まった」と実感し、それが日本人コミュニティで広まることが学校選択のポイントとなると考えた。

(2) 英語力向上のための取り組み

① 時間割と教員配置の工夫

これまで、教員配置や現地採用米人講師の勤務時間との関係で、学年によっては週3日しか英語に触れる機会がない、または、週の前半や後半に学習が固まっているなど、1週間のうちで英語に触れる日と触れない

日の偏りがあった。英語力向上のためには英語に触れる機会を増やすことが必要と考え、外国語やESLまたはART（米人講師による図工・美術）の学習によってどの学年も英語に触れられる日を極力増やすよう、

【表1】のように基本時間割の組み替えを行った。教員配置については、外国語活動・外国語の学習で日本からの派遣教員と米人講師によるチーム・ティーチング（Team Teaching：以下、TT）とすることで、ネイティブの英語に触れさせると共に、渡米して日が浅かったり、英語に苦手意識をもったりしている児童生徒のサポートを派遣教員が担い、どの子も安心して英語学習に取り組めるようにした。また、中等部英語科の教員が初等部高学年の外国語（TT）を担当することで、初等部と中等部の英語学習のつながりを図るようにした。

	月	火	水	木	金	週当たり
1年	ESL	ESL②、ART	ESL、外国語活動	ART	外国語活動	5日間/計8コマ
2年	ESL	ESL②、ART	ESL、外国語活動	ART	外国語活動	5日間/計8コマ
3年	ESL	ESL②、外国語活動	ESL、ART	ART		4日間/計7コマ
4年	ESL	ESL、ART	ESL、ART		外国語活動	4日間/計6コマ
5年	ESL、外国語	ESL、ART	ESL、ART		外国語	4日間/計6～7コマ
6年	ESL、外国語	ESL、ART	ESL、外国語	ART	外国語	5日間/計6～8コマ
7年	ESL、外国語	ESL、ART	ESL、外国語、ART	外国語	外国語TT	5日間/計8～9コマ
8年	ESL、外国語	ESL、外国語	ESL、ART	外国語	外国語TT	5日間/計8コマ
9年	ESL、外国語	ESL、外国語	ESL、ART	外国語	外国語TT	5日間/計8コマ

【表1】基本時間割（英語に関わる部分のみ、太字は日米教員によるTT、斜体は米人講師の担当）

②英検のサポート体制の強化

「中等部卒業までに2級、初等部卒業までに3級取得」を目標に掲げ、初・中両学部の英語科教員が中心となって、英検のサポートを行った。具体的には、過去問の採点や誤答に対する個別指導、休み時間や7時間目、TTの時間を活用した模擬面接などである。受検者本人の努力による面も大きいですが、初等部での2級合格や渡米後1年あまりでの準1級合格など、成果が出てきている。

③日常的に英語を活用する機会を増やす

英語の学習にとどまらず、日常的に英語を活用する機会を増やす第一歩として、教職員による行事の際の司会進行や講話を英語で行うこととした。本校は、初等部1年生から中等部9年生と年齢の幅が広いためスライドでの日本語表記や実物の提示など発達段階に応じたフォローをしつつ、私自身も全校集会で「原子爆弾」をテーマとした講話を英語で行った。卒業式では、司会進行や学校長の式辞はもちろんのこと、卒業生が一人ひとりステージ上で発表する決意の言葉も英語と日本語の両方で行った。9年生たちの流ちょうな英語スピーチに感銘を受ける保護者や来賓も多く、下級生たちにとっても素晴らしい手本となったと思われる。

3 学びのユニバーサルデザイン（Universal Design for Learning：以下、UDL）の面からのアプローチ

(1) 中等部での取り組み

①別室受験

テスト時間を延長することで実力がさらに発揮できる可能性がある生徒に対し、帰国後の高校入試における「合理的配慮」を視野に入れ、学校、家庭（本人・保護者）、スクールカウンセラー（以下、SC）の3者で協議を重ねた結果、別室受験と時間延長の措置をとることになった。時間延長は通常の1.5倍をめどとし、教員

もしくはSCの見守りの下、別室(会議室)で定期テストを受験することとした。

定期テストの際に毎回SCが来校できるとは限らないため、別室受験中の生徒に対する適切な支援の仕方を教員が学ぶ必要があった。そこで、当該生徒の承諾を得て、私も支援にあたるSCに同席し、質問が出た際の受け答えやテスト時間の見通しをもたせるための言葉がけについて、逐一メモを取らせてもらった。SCから助言をもらいながら、共有したメモを基に複数の教員が交代で支援を担当することにより、支援の仕方も徐々にブラッシュアップされていった。生徒自身も効果を感じ、本校を卒業・退学するまで継続して別室受験を選択したこと、また、この支援の仕方は、通常受験の生徒たちにも有効であったことを記しておきたい。

②試験問題形式の見直し

中等部の定期テストは各教科の担当者が作成しており、本校では、主として回収・採点の容易さから問題と解答用紙が別々になっている形式が主流であった。「解答用紙が別紙の場合、どこに答えを書けばよいか探すために視線の移動が大きく、それが負担になって実力を十分に発揮できない生徒もいる」というSCの助言を受け、テスト形式の見直しを行った。私の担当する英語をはじめ、数学でも問題ごとに解答欄を設けるとともに、全教科の試験問題で漢字に読み仮名を付けることとした。別室受験が必要な生徒に対してだけの措置ではなく、定期テストを受ける全ての生徒にとって“優しい”試験問題になったと考える。

③ワークシート

英語でお勧めの世界遺産を紹介する学習をする際に、発表に活用するワークシートを複数用意し、実態に合わせて生徒自身が選択できるようにした。1枚は、教科書の例文を参考にした紹介文のテンプレートが書かれており、自分の紹介したい世界遺産の特徴やお勧めポイントを記入する部分だけが穴埋め形式になっているもの。2枚目は、教科書の例文が、一文ごとに区切って書かれており、例文を見ながら(真似しながら)、自分の選んだ世界遺産について記述できる形式。3枚目は全くの白紙。各自の英語力を生かして自由に書き込めるものとした。

学習を進めながらその子にあった手立てをその都度考えて用意するのではなく、学習のゴールを想定したときに、そこから学習展開を逆算して学習の障壁となるものを予め予想し、選択肢を準備しておくことがUDLの基本である。一方、毎回多くの選択肢を準備することは教師側の負担も大きく、また、児童生徒が「いつも教師から与えること」に慣れてしまうのは、学びのエキスパートを育成する上ではマイナスとなる。帰国後に参加したUDLの研修会でその疑問を講師にぶつけてみた。「児童生徒に、自分はどんなサポートが必要か聞いてみたらよい」との助言を得、意識を改めたところである。

(2) 初等部での取り組み

①個別最適な学びを保証する総合的な学習の時間

本校での勤務3年目は初等部を担当し、3・4年生合同で持続可能な開発目標(Sustainable Development Goals:以下、SDGs)についての学習を行った。この学習では、大阪万博に関する学習からSDGsへの興味を引き出し、児童が研究員になりきって学習を進めていくことで「すべてのいのち輝く未来社会」につながるSDGsのアイデア(発明品の模型作成等を含む)をその子なりの方法で表現することを目指した。また、学習成果をメイプル祭(学習発表会)で発表するとともに、行事後に取り組んだ学習成果も加えて新たに動画を作成し、京都府宇治市立岡屋小学校の小畑先生(在外教育施設経験者)がホストを務めた「世界へ発信! 私たちがつくる持続可能な社会 オンライン発表会」で世界各地の在外教育施設をも含めた日本各地の

小中学校と動画発表交流を行った。児童の興味関心やその子なりの取り組み方法を中心に据えて学習活動を行い、教師はファシリテーター役を意識して関わることで、個別最適な学びを目指して学習を展開していった。

○単元名：進め！NJ国のスーパー研究員たち

○児童：ニュージャージー日本人学校 3年生1名、4年生8名、計9名

○目標：・万博やSDGsに興味をもち、SDGs達成に向けて自分たちができることを進んで考え、表現しようとする。【主体的に学習に取り組む態度】

・大阪万博のテーマである「“すべての”いのち輝く未来社会」を想定し、その実現に向けての取り組みや発明品のアイデアを考え、自分なりの方法で表現する。【思考・判断・表現】

・万博やSDGsについて知り、世界の国々や日本の抱える問題について気付く。【知識・技能】

○「授業のUD化」に配慮した学習デザインについて：

まずは、オリエンテーションやワークシート集（研究手帳）で単元全体の見通しをもたせる。資料提示に当っては、資料の内容と量を吟味し、SDGsについて中学年なりの理解を目指していく。一度に複数の資料を提示することを避け、資料一つひとつの内容を把握させていく。ICT機器を活用して、いつでも何度でも資料に触れられるようにする。また、一単位時間の学習展開においては、作業やゲームといった参加型学習の手法も取り入れ、学習意欲の維持や理解の深化を図っていく。また、行事の取り組みを振り返りつつ、互いの良さを認め合う雰囲気の中で学習を展開していく。

○指導計画（全30時間）

時	学習活動
1	オリエンテーション「万博とは？」メイプル祭に向けて学習の見通しをもつ
2-3	万博についての調べ学習、情報交換
4-5	SDGsについての調べ学習、情報交換
6	「“すべての”いのち輝く」って？
7	「“すべての”いのち輝く未来社会」のためのアイデア（発明）を考えよう
8-12	自分のアイデア（発明）に向けた調べ学習、作品作り
13-17	メイプル祭の台本作り、練習（みんなの発明を劇仕立てで発表）
18	メイプル祭当日（発表）9月30日（土）
19	発表の振り返り
20-21	Davos 会議（世界経済フォーラム）の基調講演を視聴しよう
22	もっと「“すべての”いのち輝く“日本の”未来社会」のために【公開授業】
23-27	オンライン会議で世界に発信しよう（動画作成）
28-29	オンライン会議の他校の取り組みを視聴しよう
30	全体のまとめ

○児童のアイデア

- ・水をきれいにしつつゴミを集める海の掃除機“Sea Shine Cleaner”（SDGs14）
- ・災害時に電気を使わず、摩擦熱を使って食べ物を温める“ほかほかご飯器”（SDGs11）
- ・南スーダンをマラリアから救うため、特効薬の原料となるキニーネを現地の気候状況に合わせて栽培する施設（SDGs3）
- ・洪水が原因である南スーダンの飢餓を救うための水に浮く作物の栽培設備“おなかいっぱいスマイル号”（SDGs2）